

障がい者の社会への“完全参加と平等”を！

ときめきFukuoka

特集

「命の重さ

～津久井やまゆり園事件から一年～」

2017.7
No.234

- 福障協だより 平成28年度定期総会報告
- 身障協会だより 「第62回日本身体障害者福祉大会（ぎふ清流大会）」報告
- 7月・8月の福祉用具情報 ～福岡市介護実習普及センターより～
- 福岡市身体障害者福祉協会 平成28年度 決算報告



特集 命の重さ ～やまゆり園事件から一年～

福岡市手をつなぐ育成会

理事長 向 井 公 太

「津久井やまゆり園」で利用者等に対する殺傷事件が発生した日、平成28年7月26日、この日は障がい福祉に関わる者だけではなく、今を生きているすべての人に記憶にとどめていただきたいと思う日の一つです。

わが国で、多くの命が理不尽に奪われ、故なく傷つけられた日であるということ。

この事件が発生したことを聞いた時の驚き、さらに容疑者が最近迄同施設で働いていた元職員であった事、さらに彼が述べたと言われる「障がい者は生きる意味がない」とか「安楽死させた方がよい」との優生思想に基づく発言に身の毛がよだつ思いをしたことを今更のように思い出します。

今を生きる私たちが認識できる限りにおいても、世の中の役に立つ人（特に経済的に）が世の中のメインストリームであるとの考え方が極めて強く出てきている感じがします。

自分自身と他人との間に線を引きたがる傾向がますます出ていると感じます。線を引くとおのずからどちらが優れている、いや劣っているとの思いが芽生えます。

私が所属します団体は、知的な障がいのある人に関わってきました。現在も、大半の利用者は、知的な障がいのある人ですが、現在の制度でいえばすべての障がいのある方に関わることになります。しかし、「津久井やまゆり園」の事件は知的障がい者のみに対する事件ではなく、当然全ての障がい者に係る事件であると理解しなければなりません。

また、この事件後の各関係方面の対応にも全ての人が十分留意したいものです。この事件の本質を見誤らない様にし、類似の事件が再発しない様に障がい者の人権に配慮した適切な対応をとらなければならないと思います。国は検証及び再発防止策検討のための報告書を発表しましたが、特に最近の国会での「精神保健福祉法改正」の審議の中で起こっている事態については、障がい福祉に関わる者だけでなくすべての人が、関心を払う必要があると思います。

障害者権利条約や障害者基本法、障害者差別解消推進法により、社会における障がい者に対する見方が変わってきていると感じる一方で、この日本の社会の根底に容疑者が述べているような考え方も依然として強く存在するのだとの思いを強くしました。ただし、このような考え方の存在に対して、一步一步、社会の理解を深める意識的な取り組みがさらに必要であるとの感を強くしました。と同時に、障害者権利条約が謳うように、障がい者が社会で当たり前で生きられるような社会を実現するための取り組みの歩をゆるめてはいけないと思います。

「人として大切なもの～精神科医の立場から」

うえむらメンタルサポート診療所
上 村 敬 一

私が医学部に入学した頃の頃、重度心身障害児入院病棟での実習があった。その病棟は体の自由がきかないか寝たきりの子供達ばかりで、コミュニケーションは取れず反応すらないことも多い。何の医学的知識も技術もない私たちに、そうした病棟で丸一日過ごすというもの。介護者の手伝いなど役割は特に与えられていない。見たまま感じたまま、自分で考えて動けということだった。正直私はそこで立ち尽くした。彼らが何を見聞きし考えているのか想像できなかった。彼らが生きていることの意味すら想像できず、ただ困惑するだけだった。実習も終わりに近くなった夕方、母親らしき訪問者の姿があった。それまで私の働きかけに何の反応もなかったある子にその人が近づくと、驚くことにその子は腕を伸ばし表情が変化した、会いたかったと言わんばかりの嬉しさがそこにあった。無力感に苛まれていた私にはその光景は信じられないものであった。まさに命がそこにはあった。

今回の事件は犯人が精神科受診や措置入院をしていたことなどもあり、精神医学を取り巻く様々な問題が表面化した感がある。診断や評価をする精神科医の臨床能力やその専門的技量を担保するはずの精神保健指定医制度に疑念を持たれ、さらには措置入院制度そのものの問題点を浮き彫りにした。フォローアップ体制が不十分なまま退院に至る問題は、何も措置入院に限らない精神科医療全体の問題であろう。凶行に及んだ犯人もまた精神科ユーザーだったのである。

精神科医療においてノーマライゼーションやコミュニティケアの大切さは言を俟たない。そのため様々な精神保健医療の現場では新しい取り組みや制度改革が進行中である。そこには当然関係者の思いが込められているはずであるが、完全無欠な制度というものも残念ながらありえないだろうと思う。私は、いかなる制度やシステムであろうが、そこに関わる人たちがどう立ち振る舞うかということが制度の隙間を埋めるものだろうと思うし、またそこに関わる人たち一人一人にユーザーに対する思いや想像力がなければ、制度は活きてこないと思っている。

いささか青臭い話になってしまったが、私には医学の道を歩みだした最初に見たあの光景が忘れられないのであり、だからこそ今でもあの頃感じた、人としての大切なものを忘れたくないと思っている。

「人」としての尊厳を

福岡市視覚障害者福祉協会
登 本 弘 志

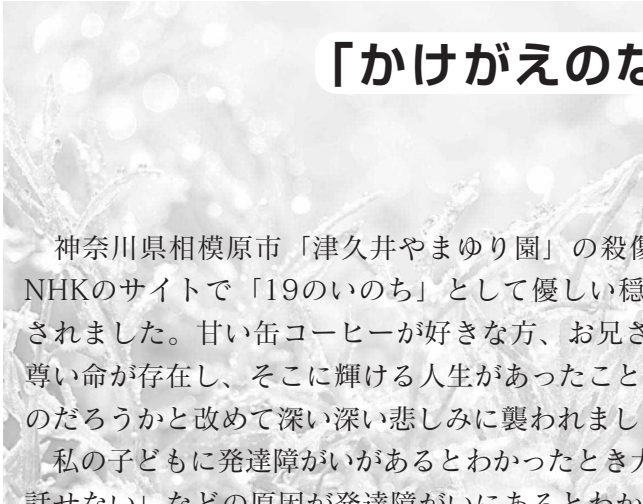
2016年は障がいのある私たちにとって、障害者権利条約に沿っての一連の制度改革の区切りとなる障害者差別解消法が施行されて、初めて健常者と対等・平等の権利が認められた、特別な年となるはずでした。

ところが7月26日、相模原市の障がい者施設「津久井やまゆり園」で、障がいのある利用者45名が殺傷されるという、想像を絶する悲惨な事件が起こりました。

また、この一年の間に8月に東京で、10月には大阪で、そして今年1月には埼玉で視覚に障がいのある方が駅ホームから線路に転落して亡くなるという、痛ましい事故が続けて発生しました。視覚障がいを持つ同じ仲間として強い憤りも感じます。

社会の多くの障壁の中で、障がいとともに生きている人たちの命がなぜ軽く扱われてしまうのか、この一年は人の命と尊厳について社会のあり方が問われなければならない、私たち障がいのある者自身が意識をもって社会に問われなければならないことを思い知らされた一年でした。障害者制度改革で一定の法的整備が進みましたが、その実現のためには障がいのある私たち一人ひとりの具体的な行動からしか実現には近づかないように思います。

事件で被害にあわれた皆さんの痛みと悲しみ、悔しさを忘れることなく、障がいの種類、障がいのあるなしを越えて、仲間とともに社会に訴え続けたいと思います。



「かけがえのない大切なもの」

福岡発達障がい者親の会「たけのこ」
松 田 慶 子

神奈川県相模原市「津久井やまゆり園」の殺傷事件から早くも一年がたとうとしています。その後NHKのサイトで「19のいのち」として優しい穏やかな表情のイラストとともに19名の思い出が掲載されました。甘い缶コーヒーが好きな方、お兄さんが大好きだった方など、やまゆり園で確かに19の尊い命が存在し、そこに輝ける人生があったことを知りました。とともになぜ命を落とすことになったのだろうかと思いを改めて深い深い悲しみに襲われました。

私の子どもに発達障がいがあるとわかったとき大変ショックでしたが、彼の「手先が不器用」「うまく話せない」などの原因が発達障がいにあるとわかったとき、ほっとしたのも事実です。同時に無邪気にケラケラ笑う彼が無性にいとおしく思えてきました。障がいがあっても彼なりに素直に懸命に生きているのです。

「19のいのち」で発達障がいのある栗原類さんがこう書かれています。「自分が社会に役立っているとは思っていません。でもそれでいいのではないのでしょうか。それよりも、自分がいることをよかったと思ってくれる人がいたり、自分がいて欲しいと思うような人がいたりすることで、人はそれぞれ成り立っていると思うのです」と。

「障害者はいなくなればいい」ではないのです。障がいがあってもなくても、どの命もかけがえのない大切なものだということを改めて強く感じました。

「“共に生きる”を前に」

一般社団法人 長崎県手をつなぐ育成会
甲 田 裕

障害者が社会の中で生きる難しさを語った書籍や、講演会などの案内に接する機会が多くなったと感じるこの頃。歩みは遅いものの、社会の皆さんの中に「違いを理解」する。「自分の中の知識だけで障害者感を決めない」などの思いが築かれつつあると、少し期待をしてみたりしてきていた。

こんな明るさを感じていた矢先、相模原市の知的障害者施設殺傷事件が発生。逮捕された元職員の男性は「障害者是不幸をつくる人たち」「役に立たない」と障害者の尊厳を否定する言動を繰り返していたと。偏見や差別に満ちた行動は許されるものではなく、全身に衝撃が走ったことを覚えている。事件のその後の報道をみると、いまでも心の痛みを覚えたのは皆さんも同じであろう。

全国育成会が発行している会誌「手をつなぐ」2016年9月号では、「障害のある人を一括りにして『不幸だ』と決めつける認識は社会の中に根強く存在します」と指摘がなされている。偶然とは言えないのか、本会誌の4月号の巻頭から「家族のかたち」と題して本人を中心に据えた微笑ましい家族写真の掲載が始まっていた。前記9月号で「楽しいこと。うれしいこと。つらいこと。一つひとつを積み重ねていく」と障害者の写真で埋め尽くして発行。落ち込んでいた暗いところに、明るい光を感じさせてくれた。

当会、久保厚子会長は、昨年8月末開催された「手をつなぐ九州大会」にて「現在の福祉は当事者が作り上げたものであり『役に立たない』とは、決して言わせない」と表明された。

私たちは「障害がある人もない人も共に安心してくらせる地域づくり」をめざし「共に生きる」を合言葉に、前に進みたい。